

厚生労働漢学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

表 1. 性別

	度数	パーセント	有効パーセント
男性	1	0.4	0.5
女性	220	98.2	99.5
合計	221	98.7	100.0
欠損値	3	1.3	
総計	224	100.0	

表 2. 年齢

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
20 歳代	5	2.2	2.3	2.3
30 歳代	43	19.2	19.4	21.6
40 歳代	98	43.8	44.1	65.8
50 歳代	60	26.8	27.0	92.8
60 歳代	16	7.1	7.2	100.0
合計	222	99.1	100.0	
欠損値	2	0.9		
総計	224	100.0		

表 3. 職種

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
助産師	68	30.4	31.3	31.3
保健師	101	45.1	46.5	77.9
養護教諭	20	8.9	9.2	87.1
その他の教諭	5	2.2	2.3	89.4
大学教員	6	2.7	2.8	92.2
その他	17	7.6	7.8	100.0
合計	217	96.9	100.0	
欠損値	7	3.1		
総計	224	100.0		

表 4. 学校と連携した授業の経験

	度数	パーセント	有効パーセント
経験あり	131	58.5	61.2
経験なし	56	25.0	26.2
学内者(養護教諭等)	27	12.1	12.6
合計	214	95.5	100
欠損値	10	4.5	
総計	224	100.0	

表 5. 学校と連携した授業の経験回数

	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
助産師	35	9.7	12.6	1	60
保健師	70	7.2	10.3	1	80
その他	9	4.6	6.0	1	20
合計	114	7.8	10.9	1	80

表 6. 職種と学校との連携経験とのクロス集計表

		経験あり	経験なし	合計
助産師	度数	39	27	66
	%	59.1%	40.9%	100%
保健師	度数	80	17	97
	%	82.5%	17.5%	100%
その他	度数	10	10	20
	%	50.0%	50.0%	100%
合計	度数	129	54	183
	%	70.5%	29.5%	100%

表 7. 「学校性教育の目的」

(複数回答:選択は3つまで)

		経験あり	経験なし	学内者	合計
命の大切さを伝えるため	度数	108	47	22	177
	%	83.1%	83.9%	81.5%	
性についての正確な知識をつけるため	度数	60	43	21	124
	%	46.2%	76.8%	77.8%	
豊かな人間(人格)形成のため	度数	48	17	8	73
	%	36.9%	30.4%	29.6%	
望まない妊娠を避けるため	度数	23	10	1	34
	%	17.7%	17.9%	3.7%	
望ましい異性観を持たせるため	度数	10	5	1	16
	%	7.7%	8.9%	3.7%	
性行動の自己決定ができるようになるため	度数	41	15	14	70
	%	31.5%	26.8%	51.9%	
性に関する情報提供を行うため	度数	14	9	0	23
	%	10.8%	16.1%	0.0%	
性行動を低リスクにするため	度数	16	1	3	20
	%	12.3%	1.8%	11.1%	
性感染症, 妊娠率, 中絶率の低下	度数	23	9	6	38
	%	17.7%	16.1%	22.2%	
避妊実行, STD 防止実施率の向上	度数	5	4	0	9
	%	3.8%	7.1%	0.0%	
性交開始年齢を上昇させるため	度数	11	5	0	16
	%	8.5%	8.9%	0.0%	
自己肯定感を保持・向上させるため	度数	19	5	2	26
	%	14.6%	8.9%	7.4%	
コミュニケーション力(男女間・親子間等)をつけるため	度数	6	4	4	14
	%	4.6%	7.1%	14.8%	
その他	度数	3	1	0	4
	%	2.3%	1.8%	0.0%	
合計	度数	130	56	27	213

表 8. 「わが国の学校の性教育について知っているもの」

(複数回答可: 選択制限なし)

		経験あり	経験なし	学内者	合計
どの教科が扱っているか	度数	74	25	21	120
	%	57.8%	45.5%	77.8%	
教科書にどのようなことが書かれているか	度数	46	9	16	71
	%	35.9%	16.4%	59.3%	
1年に何時間くらいが割かれているか	度数	25	3	10	38
	%	19.5%	5.5%	37.0%	
学年があがるにつれてどのようなことが教えられているか	度数	48	8	10	66
	%	37.5%	14.5%	37.0%	
子どもたちがどのように発達していくと捉えられているか	度数	16	2	6	24
	%	12.5%	3.6%	22.2%	
誰が教えているか	度数	96	29	18	143
	%	75.0%	52.7%	66.7%	
何を教えてもいいか、何を教えないのか	度数	14	2	3	19
	%	10.9%	3.6%	11.1%	
学校の性教育の主目的は何か	度数	28	5	9	42
	%	21.9%	9.1%	33.3%	
どのような評価方法を用いているのか	度数	4	1	4	9
	%	3.1%	1.8%	14.8%	
からだの仕組みで最初に教えられるものはどのからだの部位か	度数	26	10	2	38
	%	20.3%	18.2%	7.4%	
学校現場の性教育にはどのような流行があるのか	度数	12	2	4	18
	%	9.4%	3.6%	14.8%	
性教育がどのような時間を割いて行われているのか	度数	53	6	16	75
	%	41.4%	10.9%	59.3%	
★以上のどれについてもあまり知らない	度数	20	21	3	44
	%	15.6%	38.2%	11.1%	
合計	度数	128	55	27	210

表 9. 「わが国の学校において、クラス単位で性教育を行う(集団性教育)ことについてどう思うか」

		経験あり	経験なし	学内者	合計
クラスには、発達や行動の早い子がいる可能性がある るので集団性教育は「望ましい」	度数	8	1	1	10
	%	6.5%	1.9%	3.7%	4.9%
小学校や中学校までは知識を広く正しく伝えるために 集団性教育が「望ましい」	度数	74	30	19	123
	%	60.2%	56.6%	70.4%	60.6%
子どもの成長や準備性にばらつきがあるので集団性 教育は「望ましくない」	度数	13	5	1	19
	%	10.6%	9.4%	3.7%	9.4%
性教育は価値を伴うものなので、集団性教育に「重点 を置くべきでない」	度数	14	7	4	25
	%	11.4%	13.2%	14.8%	12.3%
よくわからない	度数	14	10	2	26
	%	11.4%	18.9%	7.4%	12.8%
合計	度数	123	53	27	203
	%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表 10. 「小学校における性教育の授業で性交について教えることについて」

(複数回答:選択制限なし)

		経験あり	経験なし	学内者	合計
効果に関する科学的根拠はないが、性交を出来るだけ早く教えることには「賛成」	度数 %	34 26.6%	21 37.5%	6 22.2%	61
性交を教えることに教育的価値があるので、教えることには「賛成」	度数 %	49 38.3%	25 44.6%	14 51.9%	88
高学年にもなると授業が成り立たないので、教えることには「賛成」	度数 %	21 16.4%	11 19.6%	2 7.4%	34
なるべく早くから性交を教えることは進歩的なので「賛成」	度数 %	7 5.5%	5 8.9%	1 3.7%	13
効果に関しての科学的根拠がないので、「無理に教えない」	度数 %	22 17.2%	3 5.4%	2 7.4%	27
小学校の性交教育は、子どもの発達段階を考えていないので「無理に教えない」	度数 %	18 14.1%	7 12.5%	3 11.1%	28
混乱を招く、もしくは逆効果の可能性があるので、「無理には教えない」	度数 %	9 7.0%	4 7.1%	2 7.4%	15
すべての子どもたちが性交に至るわけではないので「無理に教えない」	度数 %	6 4.7%	3 5.4%	0 0.0%	9
嫌がる子どももいて、人権を侵害しかねないので「無理に教えない」	度数 %	8 6.3%	2 3.6%	0 0.0%	10
保護者の価値観は多様であり、人権を侵害しかねないので「無理に教えない」	度数 %	10 7.8%	3 5.4%	1 3.7%	14
学習指導要領・ガイドライン等に扱われていないので「無理に教えない」	度数 %	4 3.1%	0 0.0%	3 11.1%	7
その他	度数 %	19 14.8%	7 12.5%	3 11.1%	29
合計	度数	128	56	27	211

表 11. 「中学校における性教育の授業で、コンドームの装着の仕方を教えることについて」

(複数回答:選択制限なし)

		経験あり	経験なし	学内者	合計
コンドームは避妊効果は高い方ではないが、対STDには効果的なので「すべき」	度数 %	95 72.5%	41 73.2%	15 55.6%	151
コンドーム装着を対STDの視点で教えるならば、緊急避妊についても教えるべき	度数 %	58 44.3%	21 37.5%	4 14.8%	83
コンドーム装着授業の効果の科学的根拠がないので「無理にしないでよい」	度数 %	7 5.3%	1 1.8%	1 3.7%	9
効果に関する科学的根拠はないが、出来るだけ早く教えることには「賛成」	度数 %	26 19.8%	13 23.2%	2 7.4%	41
コンドームのうち、男性用コンドームの装着だけを取り上げるのは女性蔑視である	度数 %	12 9.2%	6 10.7%	4 14.8%	22
避妊目的では、コンドームよりも効果の高いピルについて教えるべき	度数 %	17 13.0%	7 12.5%	2 7.4%	26
コンドームの装着方法を教えることに教育的価値があるので、教えることには「賛成」	度数 %	39 29.8%	18 32.1%	10 37.0%	67
手遅れにならないように中学1年生から教えることに「賛成」	度数 %	27 20.6%	6 10.7%	3 11.1%	36
コンドーム装着の授業は進歩的なので「賛成」	度数 %	8 6.1%	3 5.4%	0 0.0%	11
混乱をまねく、もしくは逆効果の可能性があるので、「無理に教えない」	度数 %	6 4.6%	6 10.7%	1 3.7%	13
全ての子どもたちが性交に至るわけではないので「無理に教えない」	度数 %	8 6.1%	4 7.1%	0 0.0%	12
嫌がる子どももいて、人権を侵害しかねないので「無理に教えない」	度数 %	8 6.1%	1 1.8%	1 3.7%	10
海外でも言われているように、せめて男女別々の授業にすべき	度数 %	18 13.7%	15 26.8%	9 33.3%	42
保護者の価値観は多様であり、人権を侵害しかねないので「無理に教えない」	度数 %	1 0.8%	2 3.6%	0 0.0%	3
コンドームの避妊効果は高くないので、避妊目的で教えないことが大切	度数 %	14 10.7%	5 8.9%	4 14.8%	23
その他	度数 %	10 7.6%	3 5.4%	5 18.5%	18
合計	度数	131	56	27	214

表 12. 「高校における性教育の授業で、人工妊娠中絶について教えることについて」

(複数回答:選択制限なし)

		経験あり	経験なし	学内者	合計
中絶の悲惨さを強調して、命の大切さを学ばせるべき	度数 %	40 30.8%	23 41.1%	5 18.5%	68
中絶の悲惨さは考えようなので、悲惨さを強調しすぎるべきではない	度数 %	40 30.8%	9 16.1%	10 37.0%	59
中絶はその後の赴任に結びつく科学的根拠があると思う	度数 %	66 50.8%	35 62.5%	10 37.0%	111
中絶はその後の精神的なトラウマに結びつく科学的根拠があると思う	度数 %	73 56.2%	34 60.7%	12 44.4%	119
出産を選択した方が、死亡する確率が1桁も高いことから、否定的に扱わない	度数 %	7 5.4%	0 0.0%	1 3.7%	8
中絶の講義を聞くことにより行動が変わるという科学的根拠はないので無理にせず	度数 %	2 1.5%	0 0.0%	0 0.0%	2
日本人の17%が中絶経験者なので、罪悪感を作り出す授業はしないほうがよい	度数 %	19 14.6%	7 12.5%	3 11.1%	29
中絶について教えるならば、ピルや緊急避妊法について前もってもっと教えるべき	度数 %	77 59.2%	31 55.4%	17 63.0%	125
胎内のビデオを見せるなりして、出来るだけ早く教えて驚異を持たせるべきだ	度数 %	17 13.1%	4 7.1%	2 7.4%	23
中絶の授業は進歩的なので「賛成」	度数 %	3 2.3%	2 3.6%	0 0.0%	5
中絶を教えるならば、コンドームの避妊に対する高くない効果を教えるべき	度数 %	27 20.8%	14 25.0%	6 22.2%	47
混乱をまねく、もしくは逆効果の可能性があるので、「無理に教えない」	度数 %	1 0.8%	0 0.0%	0 0.0%	1
全ての子どもたちが性交に至るわけではないので「無理に教えない」	度数 %	0 0.0%	1 1.8%	0 0.0%	1
嫌がる子どももいて、人権を侵害しかねないので「無理に教えない」	度数 %	3 2.3%	0 0.0%	0 0.0%	3
海外でも言われているように、せめて男女別々の授業にすべき	度数 %	10 7.7%	9 16.1%	3 11.1%	22
保護者の価値観は多様であり、人権を侵害しかねないので「無理に教えない」	度数 %	1 0.8%	1 1.8%	0 0.0%	2
その他	度数 %	9 6.9%	4 7.1%	1 3.7%	14
合計	度数	130	56	27	213

表 13. 「わが国の思春期の子どもたちの状況をどのようにとらえているか」

(複数回答:選択制限なし)

		経験あり	経験なし	学内者	合計
性行動が低年齢化している	度数	119	53	24	196
	%	90.8%	94.6%	88.9%	
性行動が高年齢化している	度数	2	0	1	3
	%	1.5%	0.0%	3.7%	
性行動が活発化している	度数	90	42	23	155
	%	68.7%	75.0%	85.2%	
性行動が不活性化している	度数	2	2	0	4
	%	1.5%	3.6%	0.0%	
性行動に対する慎重さが低くなっている	度数	116	52	24	192
	%	88.5%	92.9%	88.9%	
性行動に対する関心が低くなっている	度数	4	1	1	6
	%	3.1%	1.8%	3.7%	
リスクの低い性行動が多くなっている	度数	9	2	4	15
	%	6.9%	3.6%	14.8%	
その他	度数	7	1	0	8
	%	5.3%	1.8%	0.0%	
合計	度数	131	56	27	214

表 14. 「学校の性教育にどのように関わっていききたいか」

		経験あり	経験なし	学内者	合計
クラス単位の性教育の時間を使って子どもたちに命の大切さを伝えたい	度数	48	17	6	71
	%	44.9%	36.2%	28.6%	40.6%
PTAを対象に、子どもたちの現状と対応について伝えたい	度数	22	3	0	25
	%	20.6%	6.4%	0.0%	14.3%
教師を対象に、子どもたちの性の問題について伝えたい	度数	10	6	3	19
	%	9.3%	12.8%	14.3%	10.9%
問題に直面した子どもたちのサポートを個別的・継続的にしていきたい	度数	11	11	11	33
	%	10.3%	23.4%	52.4%	18.9%
問題に直面した子どもの保護者のサポートを個別的・継続的にしていきたい	度数	1	2	0	3
	%	0.9%	4.3%	0.0%	1.7%
問題に直面した子どもをサポートする教師を個別的にしていきたい	度数	5	2	0	7
	%	4.7%	4.3%	0.0%	4.0%
その他	度数	10	6	1	17
	%	9.3%	12.8%	4.8%	9.7%
合計	度数	107	47	21	175
	%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表 15. 「どのような目的で学校における性教育と連携していきたいか」

(複数回答:選択は3つまで)

		経験あり	経験なし	学内者	合計
命の大切を教えるため	度数 %	85 65.9%	40 71.4%	17 65.4%	142
性についての正確な知識をつけるため	度数 %	59 45.7%	29 51.8%	19 73.1%	107
豊かな人間形成のため	度数 %	25 19.4%	12 21.4%	6 23.1%	43
望まない妊娠を避けるため	度数 %	34 26.4%	8 14.3%	4 15.4%	46
望ましい異性親を持てるため	度数 %	5 3.9%	4 7.1%	1 3.8%	10
性行動の自己決定ができるようになるため	度数 %	75 58.1%	34 60.7%	19 73.1%	128
性に関する情報提供を行うため	度数 %	9 7.0%	2 3.6%	1 3.8%	12
性行動を低リスク化するため	度数 %	3 2.3%	4 7.1%	3 11.5%	10
性感染率, 妊娠率, 中絶率の低下	度数 %	29 22.5%	9 16.1%	6 23.1%	44
避妊実行率, STD 防止実行率の向上	度数 %	11 8.5%	4 7.1%	2 7.7%	17
性交年齢を出来るだけ上昇させるため	度数 %	4 3.1%	1 1.8%	1 3.8%	6
自己肯定感をつけるため	度数 %	33 25.6%	11 19.6%	9 34.6%	53
コミュニケーション力(男女間, 親子間等)をつけるため	度数 %	23 17.8%	7 12.5%	4 15.4%	34
その他	度数 %	0 0.0%	1 1.8%	0 0.0%	1
合計	度数	129	56	26	211

高校生を対象にした性感染症予防教育のあり方と生徒のニーズに関する研究

樋口 善之	福岡県立大学看護学部地域看護学講座
湯上 陽子	愛仁会看護助産専門学校助産学科
温品 妙子	愛仁会看護助産専門学校助産学科
西部 尚子	愛仁会看護助産専門学校助産学科
榎屋 絵美	愛仁会看護助産専門学校助産学科
野間 裕子	愛仁会看護助産専門学校助産学科
伊藤多恵子	愛仁会看護助産専門学校助産学科
増本 綾子	愛仁会看護助産専門学校助産学科
倉本 孝子	愛仁会看護助産専門学校助産学科
松浦 賢長	福岡県立大学看護学部地域看護学講座

高校生における性感染症予防教育のあり方について検討することを目的とした調査研究を行った。その結果を以下の知見を得たので報告する。

- ① 高等学校における性感染症予防教育では、「イラストや写真など」の視覚的な教材を扱うよりも、「コンドームによる予防効果」や「性交による感染」など、予防知識に直接関するものが多くみられた。
- ② 予防教育後、性感染症に対して「自分にも関係がある問題」という認識が高まった。
- ③ 希望する予防教育の受講スタイルに関して、性差がみられた。女子生徒の特徴として、「男女別クラス」「女性講師」、「教師以外の講師」を挙げる者が多くみられた。男子生徒では、特徴的な項目はみられなかった。
- ④ 高校生自身が「受講後に追加して希望する教育内容」として、「実際の症例」やその視覚教材を挙げていた

I. はじめに

近年、若者の性感染症が増加している。性感染症は、不妊や分娩時の母子感染の原因となり、さらに少子化につながる可能性がある。そのため今後親となる可能性をもつ若者に対し、性感染症予防の働きかけが必要となってくる。

そこで、学校の教師と専門家による教育とでは若者への影響がどのように違うのかを明らかにすること、また高校生自身の性感染症予防教育に対するニーズを知り、効果的な性感染症予防教育のあり方を検討することを目的とし、本研究を行った。

II. 研究方法

調査対象は、研究の趣旨に賛同の得られた大阪府・広島県・福岡県・秋田県の高校の1年生から高校3年生までの男女である。調査票は無記名とした。調査方法における倫理的配慮として、アンケート記入後各自で封筒に入れ、郵送により回収した。3,026名から調査票を回収した。なお、調査期間は2004年12月～2005年1月である。

1. 分析方法

性感染症予防教育を学校の教師から受けた者と専門家から受けた者との違いによる性感染症に対する認識の変化を中心に分析した。受講前後の意識の変化についてはMcNemar検定を用いた。名義尺度間の関連性の検討には、 χ^2 分析を用いた。統計ソフトはSPSS 13.0Jを使用した。

2. 用語の定義

性感染症予防教育とは「性感染症の影響・予防の必要性について説明すること」、専門家とは「産婦人科医，泌尿器科医」とした。

II. 結果

1. 対象の背景

回答の得られた 3,026 名のうち，受講した性教育について項目（受講した内容やその講師）に関して，欠損値のない 2,807 名を分析対象とした（有効回答率 92.8%）。その性別は男子 1,116 名（39.8%），女子 1,691 名（60.2%）であった。学年別では，1 年生 1,045 名（37.2%），2 年生 1,056 名（37.6%），3 年生 703 名（25.0%），無回答 3 名（0.1%）であった。

2. 性教育を担当した講師

性教育を担当した講師について質問したところ，「学校の教師から」1,175 名（41.9%），「専門家から」682 名（24.3%），「両方から」950 名（33.8%）となった。講師による性教育の効果を比較するため，「学校の教師から」と回答した者を教師群，「専門家から」「両方から」と回答した者を専門家群とし，以後の解析を行った。

3. 性感染症予防教育内容について

講師別に性感染症予防教育で扱われた内容では，「イラスト（教師 8.0%・専門家 13.1%）や写真（教師 10.2%・専門家 19.8%）など」の視覚的な教材を扱うよりも，「コンドームによる予防効果（教師 81.9%・専門家 80.8%）」や「性交による感染（教師 72.2%・78.9%）」など，予防知識に直接関するものを扱っていることが明らかになった。扱われた内容の中でもっとも印象に残った内容を表 1 に示した。「感染しても気づかない人が多いという話」を挙げた者が教師群 347（31.0%），専門家群（33.8%）と，共にもっとも多くみられた。

4. 受講前後の性感染症に対する意識変化

について

受講前後の性感染症に対する意識変化を McNemar 検定を用いて検討したところ，結果は全ての項目において有意であった（ $p < .001$ ）（表 2）。受講前後の性感染症に対する認識変化を，講師間で比較すると，講師別による性感染症に対する認識変化には差がみられなかった。（表 3）

5. 希望する予防教育の受講システムについて

希望するクラスの構成では「男女別クラス」を希望する者の割合は男子 40.3%・女子 50.4%であり，女子生徒のほうが多かった（表 4）。

希望する講師では，「教師から」（男子 45.5%・女子 26.4%），「専門家から」（男子 73.2%・女子 70.3%）と専門家を希望する者の割合が高く，その中でも女子生徒の特性として「女性講師から」（男子 43.9%・女子 79.6%）を挙げるものが多かった。男子生徒では，特徴的な項目はみられなかった。

希望する受講クラスの人数では，「10 人以下」（男子 14.8%・女子 13.7%），「クラス単位」（男子 46.1%・女子 44.5%），「学年単位」（男子 34.4%・女子 33.5%），「学校単位」（男子 34.2%・女子 28.0%）となった。

6. 希望する教育プログラムについて

「受けた性感染症予防についての授業・講演に対して望むことはありませんか。」という設問に関して，講師別にクロス集計を行った（表 5）。高校生自身が「受講後に追加して希望する教育内容」として「実際の症例の話」（教師 15.5%・専門家 14.7%）や「症例の写真」（教師 14.2%・専門家 11.8%）を挙げるものが多かった。また，「症状に気づきにくい」（教師 12.6%・専門家 10.7%），「不妊の原因の一つとなる」（教師 8.3%・専門家 7.7%）も多く挙げられていた。講師別による希望するプログラムに統計学的有意差はみられなかった。

Ⅲ. 考察

表 2・3 の結果から、受講後「自分の問題」としての認識が高まっていることが示された。講師別による認識の変化に有意差はみられなかった。このような背景として、生徒自身が性感染症予防教育に対して、講師の別に関わらず関心を持って取り組む姿勢を有していること、学校の教師においても教科書だけでなく様々な資料や教材を用いて、より深い内容の教育を教師も取り組んでいる、等の考えられる。印象に残った内容として教師群、専門家群共に「感染しても気づかない人が多いという話」を挙げていることから、今回の調査結果からは、講師の違いやそのコンテンツ扱い方による生徒の受け取り方に大きな違いはみられなかった。

外部の専門家による教育に期待されることは、その講演や授業を契機として、1) 教師自信が生徒と一緒に新しい知識を得ること、2) 性教育の実際を体験し、生徒と共に考えるという貴重な時間を共有すること、が挙げられる。今回の質問紙調査では、生徒自身の教育効果をその対象としたが、今後は、性教育を担当する教師に与える教育的効果についても検討する必要があると考える。

性教育を受講する際にどのような形態で受講したいか、という設問に対しては男女共に「専門家から」を挙げる生徒が多かったことから、生徒にとっては外部の専門家による性感染症予防教育は魅力的な者として捉えられていると考えられる。普段の授業では扱われない内容や性に関する専門的知識に関する期待と共に、安易なイベント意識である可能性も否定できない。しかし、「実際の症例の話」や「症例の写真」が希望する教育プログラムにも挙げられていたことから、様々な臨床経験や専門的知識を持つ専門家が性感染症予防教育を行なうことは、高校生にとっても興味を持って授業に参加することにつながることを期待される。興味本位での期待度とそれを利用した

有効な教育方法を検討していく必要がある。

また、今回の調査により、得られた知見の一つとして、女子生徒のニーズとして「女性講師からの性教育」、「性感染症と不妊関係」が挙げられていたことから、クラス単位にこだわらず、少人数制やクラス以外の単位での性教育についても検討していく必要があると考えられる。

Ⅳ. まとめ

以下に、本研究の知見をまとめる。

- ① 高等学校における性感染症予防教育では、「イラストや写真など」の視覚的な教材を扱うよりも、「コンドームによる予防効果」や「性交による感染」など、予防知識に直接関するものが多くみられた。
- ② 予防教育後、性感染症に対して「自分にも関係がある問題」という認識が高まった。
- ③ 希望する予防教育の受講スタイルに関して、性差がみられた。女子生徒の特徴として、「男女別クラス」「女性講師」、「教師以外の講師」を挙げる者が多くみられた。男子生徒では、特徴的な項目はみられなかった。
- ④ 高校生自身が「受講後に追加して希望する教育内容」として、「実際の症例」やその視覚教材を挙げていた。

文献

- 田代恵子：養護教諭の立場から考える性教育，助産雑誌，医学書院，vol158，No4，p37：2004
- 川畑愛義：教師のための性教育，東山書房：1986
- 黒川義和：人間の性と教育，一風社：1985
- 佐山静江，他：助産師による性教育を実現するために，助産雑誌，医学書院，vol158，No4：2004
- 西山詮・稲村博，他：性一親と教師のための思春期学，情報開発研究所：1996
- 藤内修二，他：助産学講座7 地域母子保健，医学書院：2003

表 1. 講師別、受講した性教育の中で印象に残った内容

	教師群 度数 %	専門家群 度数 %	合計 度数 %
症例	198 17.7%	358 22.6%	556 20.6%
写真	39 3.5%	85 5.4%	124 4.6%
イラスト	15 1.3%	22 1.4%	37 1.45%
ビデオ	134 12.0%	129 8.2%	263 9.7%
不妊	49 4.4%	85 5.4%	134 5.05%
性交	97 8.7%	117 7.4%	214 7.9%
コンドーム	125 11.2%	111 7.0%	236 8.7%
感染源	100 8.9%	129 8.2%	229 8.5%
気づかない	347 31.0%	534 33.8%	881 32.5%
その他	16 1.4%	11 0.7%	27 1.0%
合計	1120 100%	1581 100%	2701 100%

表 2 受講前後の性感染症に対する意識変化

	事前		事後	
	n	%	n	%
何も感じない	863	31.1%	337	12.3%
関係のない問題	1,202	43.3%	470	17.1%
周囲の問題	1,836	66.1%	1,079	39.3%
身近な問題	831	29.9%	1,654	60.3%
怖い	1,940	69.8%	2,265	82.5%
自分の問題	1,435	51.6%	2,013	73.3%
応答数	8,107	291.7%	7,818	284.8%
ケース数	2,779		2,745	

表 3. 講師別による認識の変化

		認識あり→ 認識あり	認識あり→ 認識なし	認識なし→ 認識あり	認識なし→ 認識なし	合計
教師	度数	842	24	150	88	1,104
	%	76.3%	2.2%	13.6%	8.0%	100.0%
専門家	度数	1,209	22	220	100	1,551
	%	77.9%	1.4%	14.2%	6.4%	100.0%
合計	度数	2,051	46	370	188	2,655
	%	77.3%	1.7%	13.9%	7.1%	100.0%

表 4. 希望する受講体制(女性講師から)

		はい	いいえ	合計
男	度数	447	575	1022
	%	43.7	56.3	100
女	度数	1271	299	1570
	%	81.0	19.0	100
合計	度数	1718	874	2592
	%	66.3	33.7	100

表 5. 講師別今後の性教育において希望する内容

		教師群	専門家群	合計
特になし	度数	647	932	1579
	%	58.9	61.0	
症例の話	度数	170	224	394
	%	15.5	14.7	
症例の写真	度数	156	180	336
	%	14.2	11.8	
症例のイラスト	度数	79	89	168
	%	7.2	5.8	
症例についてのビデオ	度数	109	173	282
	%	9.9	11.3	
不妊との関係について	度数	91	117	208
	%	8.3	7.7	
性感染症との関係について	度数	33	41	74
	%	3.0	2.7	
コンドームの効果について	度数	71	88	159
	%	6.5	5.8	
自分が感染源となりうることについて	度数	89	108	197
	%	8.1	7.1	
気づかない場合について	度数	138	164	302
	%	12.6	10.7	
質問する時間が欲しい	度数	35	35	70
	%	3.2	2.3	
個別相談の時間が欲しい	度数	37	54	91
	%	3.4	3.5	
その他	度数	13	16	29
	%	1.2	1.0	
合計	度数	1099	1528	2627

十代分娩の特性に関する研究

～十代出産の多いエリアにおけるデータ分析～

田上 裕子	田川市立病院・リプロの会
井上 美鈴	田川市立病院・リプロの会
林 昭子	田川市立病院・リプロの会
本田美祐紀	田川市立病院・リプロの会
高崎 望	田川市立病院・リプロの会
小林寿美子	田川市立病院・リプロの会
樋口 善之	福岡県立大学看護学部地域・国際看護学講座
松浦 賢長	福岡県立大学看護学部地域・国際看護学講座

十代分娩の特性を把握するため、十代出産の多い地域にある病院における、平成 15 年度の分娩台帳・外来カルテ等から、十代の全分娩例に関する情報を分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 18 歳分娩例のうち経産が過半数を占めていた。
- (2) 経産例には中絶を経験したものはいなかった。
- (3) 16～17 歳で分娩した者（全例初産）のうち、約 30%が中絶を経験していた。
- (4) 18 歳経産例のほとんどは、17 歳で第 1 子を出産していた。
- (5) 17 歳以下の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は 16.7%であったが、分娩時には 58.3%が既婚者であった。
- (6) 18～19 歳の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は 61.1%であった、分娩時には 94.4%が既婚者であった。
- (7) 初産例においては、初診時の妊娠週数が 22 週をこえるものが 18%いた。
- (8) 妊婦健診については受診状況は総じて良好であったが、母親学級を受講したものは少数であった。
- (9) 初産例に喫煙しているものが 59%と多かった。

Ⅰ. はじめに

本稿では、十代で分娩したものの特性に焦点をあてる。十代の分娩が全国でも多いエリアにある病院の平成 15 年度の記録を分析する。

福岡県は人工妊娠中絶数が多い県である。さらに福岡県内の平成 8～10 年の田川市郡のデータを見ると全出生に占める 20 歳未満の母親の出生割合は 6.08%であり、福岡県の 1.96%、全国の 1.45%と比較しても高い。また、20 歳未満の人工妊娠中絶に関しても平成 10 年の福岡県の 11.0(女子人口千対)に比して田川地区は 16.6 と高かった。このように田川市郡の 10 代出産、人工妊娠中絶は全

国の平均と比較して高い状況にある。

今回は、その地域にある大規模病院のうち、A 病院にて分娩した十代の特性について分析することにした。同病院がカバーする田川市郡の外観を図 1 に示した。

Ⅱ. 対象と方法

福岡県田川市にある A 病院における平成 15 年度の分娩台帳・外来カルテ等から、十代の全分娩例に関する情報を分析した。分析の対象となった変数は、全分娩に占める割合、初診時妊娠週数、妊娠出産歴、人工妊娠中絶歴、婚姻状況、喫煙状

況、飲酒状況、STI、母親学級受講、健診受診、等である。

Ⅲ. 結果および考察

1. 妊娠出産歴

図2に、平成15年における十代全分娩例の妊娠出産歴を示した。

まず、平成15年度の分娩総数は468例であり、全分娩に占める十代分娩の割合は6.4%であることがわかった。

十代分娩例の初産の割合をみると、初産22例(73.3%)、経産8例(26.7%)であった。14歳から17歳までの分娩は、すべて初産であった。一方、18歳、19歳における分娩は、そのうちの44.4%が経産であることが明らかになった。

2. 人工妊娠中絶歴

十代分娩例の、中絶経験の有無を見ると初産22例中5例(22.7%)に中絶経験がみられた一方で、経産8例においては中絶経験があるものは皆無であった。

16歳～17歳で分娩した者(全例初産)のうち、約30%に中絶経験がみられた。

3. 経産例における初産時年齢

18歳から19歳の経産例8例の、初産時年齢を図4にまとめた。ほとんどが第1子出産後1年で第2子を出産していることがわかった。

4. 婚姻状況

17歳以下の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は16.7%であった。分娩時には58.3%が既婚者であった。17歳以下の母親の約4割が未婚であることが明らかとなった。

18歳、19歳の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は61.1%であった。分娩時には94.4%が既婚者であった。

5. 初診時の妊娠週数

初産例においては、12週未満が6例(27.3%)、12-22週未満が11例(50.0%)、22週以降が4例(18.2%)であった。

経産例においては、12週未満が5例(62.5%)、12-22週未満が2例(25.0%)、22週以降が1例

(12.5%)であった。

6. 妊婦健診回数・母親学級受講

A病院での妊婦健診スケジュールであるが、12週、16週、20週(胎児スクリーニング)、24週、27週、33週、35週、37週、以降週1回、となっている。

初産例では、健診回数が5回未満のものは5例(22.7%)、5-9回のものは7例(31.8%)、10回以上のものは10例(45.5%)であった。

経産例では、健診回数が5回未満のものは皆無、5-9回のものは3例(37.5%)、10回以上のものは5例(62.5%)であった。

母親学級を未受講のものは、初産で16例(72.7%)、経産で4例(50.0%)であった。

7. STI・喫煙状況

A病院ではSTIに関しては全例検査をおこなっていない。何らかの訴えがあった場合に検査をおこなっている。

任意の申し出による検査にてSTIに罹患しているとわかったものは、初産では3例(13.6%)、経産では1例(12.5%)であった。

喫煙状況であるが、喫煙しているものは、初産では13例(59.1%)、経産では2例(25.0%)であった。有意な傾向があった。

飲酒については1名のみが該当した。

Ⅳ. まとめ

以下のことが明らかになった。

(1) 18歳分娩例のうち経産が過半数を占めていた。

(2) 経産例には中絶を経験したものはいなかった。

(3) 16～17歳で分娩した者(全例初産)のうち、約30%が中絶を経験していた。

(4) 18歳経産例のほとんどは、17歳で第1子を出産していた。

(5) 17歳以下の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は16.7%であったが、分娩時には58.3%が既婚者であった。

(6) 18～19歳の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は61.1%であった、分娩時には94.4%が既婚者であった。

(7) 初産例においては、初診時の妊娠週数が22週をこえるものが18%いた。

(8) 妊婦健診については受診状況は総じて良好であったが、母親学級を受講したものは少数であった。

(9) 初産例に喫煙しているものが59%と多かった。